アンビュ・バッグ

日本ではアンビュ・バックといえば蘇生用のバッグのことだとわかる。しからばアンビュとは何かと聞けば10人中９人は答えられないだろう。蘇生用バッグのメーカーの名前であるというのが答えとしてましな方である。もったいぶらないで答えを明かすと，air-mask-bag-unit の AMBU なのだそうだ。疑り深い方は，呼吸療法士用の教科書，“Respiratory Care”(Burton, Gee,Hodgkin ed.;Lippincott) を参照されるとよい。

アンビュ・バッグを作ったのは Rubenという人で，1955年に Anesthesiology に発表されている。Ruben というのは実に懐かしい名前である。鋼鉄の細いスプリングで一方弁を支えた Ruben's valveがアンビュ・バッグの心臓部で，バッグを押すとパクン，パクンという音が隣の部屋からよく聞こえた。その後，日本でもイミテーションがずいぶん作られたが，本家では真似をしようたってこれだけの技術は真似できないとうそぶいて，特許も取らなかったと聞いたことがある。どうやら，ミソはらせん状のスプリングのたわみ加減だったらしい。その後，一方弁そのものはプラスチック製に取って代わられたが，ゴム製のバッグに一方弁を２つ付け，酸素圧や電力の助けを借りずに，人の手とバッグの弾性だけで人工換気を行うというコンセプトは依然として変わっていない。Self-reflling bag とかSelf-inflating bagというのは誠に適切な呼び名であるのに，適当な日本語がないのが残念である。

1950年代は，欧米でポリオが猛威を振るった時期にあたる。コペンハーゲンでは，1952年の大流行のとき，１カ月以上人工呼吸を要するポリオ患者が，ブライダム病院だけで１０２人に達したという。現代の大病院でも一度に１００台ものベンチレータを動かせるところは極めて少ないと思う。

1952年といえば鉄の肺はあったが，現在のような気管内に間歇的陽圧をかける方式のベンチレータはまだまだ開発途上であった。そこで，まず麻酔科医に総動員令が下され，ついで多数の学生が集められて24時間体制で用手的人工換気が続けられた。コレラや天然痘や梅毒（エイズも?)の蔓延が医学の発展に寄与したように，ポリオの大流行も呼吸管理の上で三つの大きな発展を促した。一つは，血液ガスの測定と解釈が実験室から出て臨床の場で普及したこと。二つめは，人工呼吸法の発達，とくにベンチレータの開発が促進されたこと。そして，リグス病院麻酔科の Ibsenによって ＩＣＵが設立されたことである。

ポリオ患者に対する用手的人工換気の写真を見ると，口許にソーダライムとバッグを直列につないだto-and-fro systemを使っている。1955年に作られたアンビュ・バッグがポリオ患者の用手的人工換気にも大いに活用されたのではないかと想像する。

プラスチック全盛のこの世にあって，アンビュは相変わらず黒々としたゴムにこだわっている。バッグ押しを天職と思っている（思いたい）わたくしにとって有り難いことである。何といってもバッグは手に馴染むものがよい。世の中豊になると食い物にまでこだわりを求めるではないか。

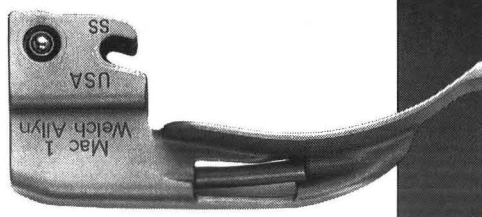
（編集子）

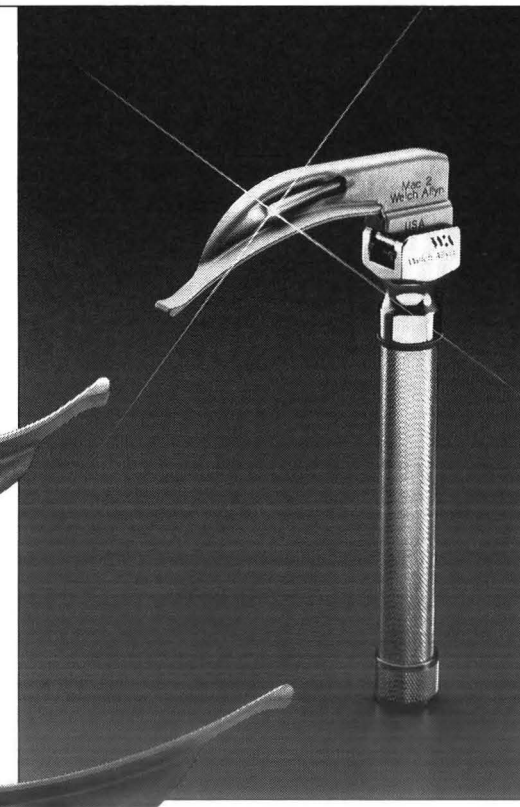
医療に貢献・社会に奉仕

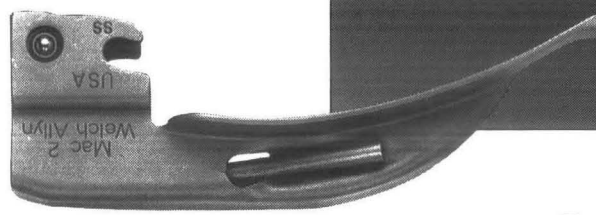
ハロゲン・ファイバーオプティック喉頭鏡

Welch Allyn

米国　ウェルチアリン社







- ファイバー部分の交換可能
- ブレード部に電気的接点なし
- ブレード部に電球がないので安全
- ブレード部分はオートクレーブ可能
- ハロゲン球使用で2倍明るく3倍長持ち

承認番号：58日輸第903号

日本総代理店

株式会社松本医科器械
MATSUMOTO MEDICAL INSTRUMENTS, INC.
541 大阪市中央区淡路町2丁目4-7
TEL(06)203-7651　FAX(06)226-1713

東京支店 TEL(03)3814-6683　FAX(03)3815-4341
札幌(011)727-8981　仙台(022)234-4511　横浜(045)423-3911
名古屋(052)264-1481　金沢(0762)23-5221　広島(082)223-4571
福岡(092)474-1191　浦和(048)825-2110

078-03M